入選

塙　麻美（はなわ　あさみ）　第四中 ２年生

作品名：その人らしさを知る
図　書：スパイクスランナー

本のタイトルを見たとき、陸上をテーマにした物語だと分かった。そのタイトルが『スパイクス　ランナー』だ。私も陸上部に所属しているので読み易い本だと思った。

この本には何度も「わからない」という表現が出てきた。読み進めていくと、だんだん「わからない」という表現が理解できるようになった。

登場人物は、スランプに陥っている選手、けがをしてマネージャーになった者、自分の才能を知っている天才ランナーなどがいる。これらの登場人物の心情の変化にとてもドキドキさせられた。

「走らない者、跳ばない者、投げない者だからこそ果たせる役目。」という表現がある。ここから人の役割について改めて考えた。私にも役割があり、学校行事での係や委員、部活の中での仕事がある。また、友達とのかかわりの中で私の役目があるのかもしれない。しかし、この役目は普段自分で考える機会は少ないかもしれない。逆に、友達から私の役目を気づかせてくれる場合もある。本文でも小学一年生の女の子が自分の役割を果たそうと頑張るシーンがあった。これもきっと女の子の家族がその役割を気づかせていたからなのかもしれない。このように役割というのは、友人や家族との間で自然につくられていくものなのだろう。

もう一つ気づいたことがある。それは、自分自身を理解することは難しいということだ。天才ランナーは自分を走るマシンのように扱われた監督を嫌に思い、陸上に関して無名の高校に自分の意志で転校した。きっと、この結論に至るまでは不安や悩みもあったはずだ。しかし、彼はしっかりと自分と向き合ったことで、自分自身が本当にやりたいことや自分のあるべき姿を理解できたのだと思う。今の私にとって本当にやりたいことは見つかっていない。一方で、スランプに陥っていた選手も競技の中で少しずつ自分を見つめていき、本来のランナーとしての姿を取り戻すことができた。これも数カ月のスランプの期間に自分自身を一生懸命理解しようと

したからこそだろう。
　私達は絵をかく才能だったり、スポーツが上手かったり、数学が得意だったりする。一人一人が持っている能力や才能はバラバラなのだ。また、兄弟や姉妹がいるのかいないのか、家庭が豊かなのか豊かでないのかもそれぞれ異なる。こうした才能や環境の違いだけでもそれぞれの役割、役目が変わってくるのかもしれない。ランナーとマネージャーのやりとりから、お互いを尊重し合いながらお互いにどういうものか、お互いの可能性はどれだけなのかを問うているようにも感じた。相手に興味をもつということは、自分が何に興味を持っているかを知ることにもつながると思った。「おまえにはわかんない楽しみ方が、おれ、できるんだぞって。」という言葉の意味が理解できたように感じた。
　私の持つ可能性はどのくらいの大きさなのか。また、私の気づいていない役割や役目は何か。こうしたことを時間をかけて見つけていくことが大切だと思う。また、本当に自分の好きなことや挑戦したいことはまだ分からない。これを知るには自分がどんな人間なのかを知る必要がある。そのためには、自分としっかり向き合うことが大切だろう。そのためには、自分を知るだけでなく、友人や家族と真剣に向き合うことが大切になってくるだろう。真剣に向き合うことで自分の見えていなかった役割が見えてくるかもしれない。また、将来の進路や適した仕事を知るためのヒントになる場合もあるだろう。役割や役目を見つけることは、自分らしさを知ることに他ならないと思う。これからも、家族の中、友人とのかかわりの中、部活動での交流を通し、今まで気づかなかった新しいその人らしさを探していきたいと思う。